

池田正之輔と戦後初期日中貿易（上）

民間貿易協定に奔走―庄内出身政治家の足跡

岡崎 雄兒

はじめに

日本と中国との貿易経済関係が年を追って盛んになっているが、国交がまだ正常化していなかった時代に両国の経済交流発展のため力を尽くした庄内出身の政治家がいた。「池正」と呼ばれ親しまれた池田正之輔である。「天下のご意見番」を自称し、まれにみる毒舌家として知られた。¹ 手元にある人名事典で池田は次のように記述されている。

いけだまきのすけ
池田正之輔

一八九八年―一九八六年（明治三十一年―昭和六十一年）戦後の政治家。山形県生れ

日大卒読売新聞社に入社し、論説委員、取締役兼総務局長、同盟通信理事などを歴任。一九四二年（昭和十七年）政界入りして以来、山形県選出の衆議院議員。一九五四年日本民主党の結成に参加、副幹事長に選ばれた。同年訪ソ議員団の団長としてソ連を訪問。日中貿易促進連盟理事もつとめた。一九六〇年第二次池田内閣の科学技術庁長官に就任。一九六八年日通事件に収賄罪で起訴され、一時自民党を離党した。²

池田ははじめ読売新聞社に入社したが、論説委員や取締役、総務局長になったのは報知新聞社であり、理事を務めたのは日中貿易促進「議員」連盟であった。

また日通事件とは、大手運輸会社―日本通運株式会社が、自社ビル建設工事などを通じて裏金をつくり、業界において寡占権益を守ろうと政界工作を行った贈収賄事件である。近年、企業犯罪は枚挙にいとまがなく、それほど人々の耳目に残らない。しかし本事件は、今から三十余年前、現職の国会議員が収賄で起訴され、初の実刑が確定した事件として注目を浴びた。池田は旧ソ連、中国など対社会主義圏諸国との交流に力を尽くし、特に第二次から第四次にわたる日中間貿易協定では日本側首席代表として協定書に署名し、初期日中交流史に名を残したのだが、この事件によってその「功績」を取り消しにされてしまった感がある。

昨今、日中関係が難しい局面を迎えると、かつて日中関係の改善のため活躍した松村謙三、古井喜実、藤山愛一郎などの政治家がすべて鬼籍に入ってしまった、パイプ役がいなくなってしまったことが嘆かれる。その当否はともかく池田はなぜこれらの人々とは違う道を歩むようになったのか。これまで身近な関係者を除き一般に知られることの少なかつた池田の実像―池田の果たした役割と限界を追ってみた。

第一節 生い立ちと「満州」体験

池田は、昭和四十二年（一九六七年）十一月七日より、東京新聞に六回連載で「私の人生劇場」と題する回想を寄稿した。これによれば、池田は、明治三十一年（一八九八年）、一月二十八日、山形県飽海郡観音寺村芹田に生まれた。観音寺村は、周辺の一帯、大沢、日向の三カ村と合併し、現在は飽海郡八幡町となった。米どころ庄内平野の最北端に位置

する人口七千人ほどの町である。いまでこそ山裾に鳥海家族休暇村など観光施設が設けられているが、明治末年の観音寺村はまったくの農村で、池田の生まれた芹田は、村の中心部から外れた荒瀬川沿いの小さな集落だった。酒田―観音寺村間に乗合バスが運行されたのは、大正十二年（一九二三年）のことである。⁴

池田の生家は庄内で何百年も続いた農家で、一応名の知れた家柄だったと記している。

正之輔は四男三女の次男だった。観音寺小学校高等科を卒業後、隣の本楯の耕地整理組合で工事場の人足をやり、この仕事がなくになると郵便局の配達夫に採用される。厳冬期、一通のハガキを配達するために深い雪をこいで歩くのは十二、三の子供には辛い仕事であった。貧乏に嫌気がさし、大正三年（一九一四年）春、故郷を飛び出し上京。苦勞して働きながら中学に通う。後に田中角栄が学んだという中央工学校などいくつかの学校を転々とした。家柄は良かったというものの、寒風吹きすさぶ東北の農村に生れ、苦學する。このあたりは同じように日中間の橋渡しとして池田の後、活躍することになる松村謙三や古井喜実とは雲泥の違いだ。

そのうちどういう経緯か不明だが、日本大学の山岡万之助学長に見込まれて大正九年（一九二〇年）、同大学予科に試験、入学金を免除されて入学する。この年、日本大学は大学令による大学として明治大学、法政大学などと共に設立が認可された。池田は、ここで日大新聞の創刊に情熱を傾けた。

さらに各大学を網羅する大学新聞連盟の組織作りに奔走、後に社会党委員長になり右翼の兇刃に倒れた早稲田大学の浅沼稻次郎を知る。ところが少年時代からの苦勞、上京後の苦學の無理がたたったのか予科二年の頃、突然咯血する。結核は不治の病のように思われていて、実際多くの若者が死んでいった時代だ。池田は失意のうちに故郷に帰った。

池田の郷里、観音寺村の隣―酒田は東北有数の港町として栄えていた。そこでひとつの騒ぎが持ち上がった。地元の政友会が日頃スポンサーとして何かと世話になっている酒田の大地主―本間家の先祖である本間光丘を担いで神社設立の運動を起こしたことによる。本間家は、「本間さまには及びもないが、せめてなりたやお殿様」といわれ、全国に名

を知られていた大地主である。光丘自身は穀倉地帯の田圃を守るため数十トにも及ぶ砂防林を築くなど地元では高く評価されている人物。最近、「公益の祖」として再評価が進められているが、この神社の建設資金として、地元政友会が、耕地一反歩につき一円也の寄付を小作人に求めたため、大きな不満が巻き起こっていた。

義憤に駆られた池田は、この反対運動に飛び込み大活躍する。しかし仲間と頼む冬休みで帰省中の学生たちもいざとなると庄内で絶大な力を誇っていた本間家に恐れをなし、次々に脱落してしまう。池田は孤立無援となり、結局、光丘神社は「郷社」として創建を内務大臣から許可される。池田は大きな敗北感を胸に再び故郷を後に上京する。この間になぜか結核はすっかり治っていたという。しかし運動は挫折したとはいえ、池田正之輔の名はこの事件で庄内一円に広く知られるようになった。

大正十一年（一九二二年）秋、日大に復学した池田は、また日大新聞の編集に関係し活躍する。翌十二年九月一日、関東大震災が発生した。総長松岡康毅の被災死に伴う大学の人事異動の結果、当時東京区検の首席検事で講師として刑事訴訟法を講じていた塩野季彦が理事に選任されることになった。これに対し学生による排斥運動が起こった。池田も運動に加わろうとしたが、新総長の平沼騏一郎にもかく塩野に会うことを勧められた。会った結果、すっかりその人柄に惚れ込んでしまった。後に法務大臣に就任し、司法関係で力をもつ塩野季彦も池田を認め、池田は塩野を終生の恩人と仰ぐことになる。

塩野のひきもあって、池田は大正十五年（一九二六年）三月卒業後、すぐに日大の出版部長などに重用された。しかし自ら生意気盛りだったと書いているように、その傍若無人ぶりにより周囲から白眼視され、その結果日大での仕事に嫌気がさしてしまった。そして新天地を求めて中国に渡るようになる。

池田が中国に渡った昭和二年（一九二七年）には、金融恐慌が起こり、社会不安が広がっていた。これに対し、田中義一内閣は、「北洋軍閥打倒、全国統一」を目標に北伐を続ける中国革命の大きなうねりを阻止するため山東出兵に踏み切

り、大陸進出に打開を求めていた。

池田が中国問題に突っ込むきっかけには、池田自身はどこでもふれていないが、同郷の先輩―伊東知也の影響があったのではないかと考えられる。伊東は明治六年（一八七三年）、酒田の医者の子に生まれた。上京して早稲田大学の前身―東京専門学校に入学し、政治学を修め、明治二十九年（一八九六年）卒業すると、台湾総督府旧慣調査会囑託となる。のち札幌の露清学校で中国語、ロシア語を修得し、明治三十一年（一八九八年）から東部シベリア・満州・福建・広東の各地方を巡遊して対外問題の処理に尽瘁した。中国・朝鮮に赴くこと十数回、同四十四年（一九一一年）、辛亥革命に参画して孫文ら革命の志士と交わり「支那浪人」と称され、犬養毅、杉浦重剛、頭山滿らの知遇をうける。雑誌「日本及日本人」記者となり、翌四十五年三期連続八年間衆議院議員に在任、この間対支連合会、国民外交会の評議員、幹事を務め、雄弁をもって知られたという。⁶ こうした伊東の事績を池田は知っていたはずである。

日大で大学新聞の編集に携わっていた池田は、旧満州でやはり新聞関係の仕事をしように考え、あちこちの新聞社にあたって特派員にしてくれるよう頼み込んだ。しかし中国問題になんの実績もない若者を相手にしてくれるところは当然ない。ここで池田は生来の強心臓ぶりを発揮、ついに「やまと新聞」の矢部貞治編集局長（のち東大教授、拓殖大学総長）が名前だけの特派員にすることを承知してくれた。大連に渡った池田は、山岡日大学長の人脈から「満州日々新聞」に採用してもらい、経済担当記者となった。ここで池田は平社員にもかかわらずたいした仕事もせず、もっぱら満鉄の資料部で山のような資料を読み漁った。これが後年中国問題に取り組むきっかけとなったと記している。

大連ではこんなエピソードがある。奉天、現在の瀋陽は旧満州を支配し大きな影響力をもっていた張作霖の本拠地だった。この張に対し、田中義一内閣は、日本の諸権益を守り、拡大するため張に圧迫を加えていた。しかし蒋介石が北伐を開始し、外国の干渉を排除して中国統一を目指していた。中国の世論は排日、抗日に燃え盛っている。張は当初日本に支援されていたが、引き続き日本軍部の要求に屈すれば、東北の支配者としてその地位を保てなくなると考え、次第

に日本の要求に背を向け始めていた。こうした状況は陸軍をはじめわが国の対中強硬派を刺激したが、池田はこれに乗、「張作霖追放、奉天城乗っ取り計画」をぶち上げる。そして仲間とともに満鉄の松岡洋右副総裁や関東軍の実力者、河本大作大佐に運動資金を出すよう掛け合うが結局相手にされなかった。⁷

池田の大陸体験とはいわゆる満州浪人のそれと変わるところがない。酒田で寄付金を強要された小作人に同情して孤軍奮闘した池田の面影はここではみられない。

第二節 酒田で新聞発行、のち上京

池田の大陸生活は一年にも満たなかった。というのは昭和三年（一九二八年）二月に行なわれた総選挙に立候補すべく帰国したからである。池田は無産党から出るつもりだった。しかし地元山形二区では日本労働党から白旗松之助が立候補を表明しており、やむなく断念、白旗の応援で飛び回った。このわが国最初の普通選挙の結果は政友会、民政党が二百十九と二百七議席獲得で伯仲、無産党はわずか八議席で池田が応援した白旗はあえなく落選した。池田は他日を期して酒田で、『大衆日日新聞』を同年四月創刊する。昭和三年といえればわが国は景気後退に陥り、東北地方は冷害の影響もあって農民は窮乏に追い込まれていた。翌昭和四年（一九二九年）にはニューヨーク・ウォール街の株式が暴落、世界恐慌が始まり、日本経済はどん底に突き落とされた。

庄内地方でも農村の子女の身売りが日常茶飯で、役場に「娘の身売りの場合は、当相談所へ御出で下さい」という掲示が貼られていた。⁸ こうした状況のなかで各地で無産運動が高まってきたが、池田は、この機をとらえ全国的にも草分け的な無産党系の新聞を発行したわけだ。池田は一面の題字下に毎号、「われ大衆と共に歩まん―池田正之輔」というフレー

ズを掲載した。かつて学生時代、「光丘神社」設立反対運動に見せた反権力意識を、今度は小作争議支援に向けていった。当時酒田には日刊紙として、地主団体（有恒会）の『酒田新聞』と政友会系の『両羽朝日新聞』があり、新たな日刊紙の参入は難しかったが、池田は単純で素朴な泥臭い見出しを記事につけ、鋭い視点で問題を抉り出し農民の心を捉えていった。また洒脱なことも考えており、「御大典奉祝記念事業」として酒田芸妓人気投票を企画し酒田町民の話題を独占したこともあった。

池田は不正を暴き弱者を救済するためペンを武器に、題字下に掲げたとおり大衆と共に歩まんの姿勢で奮闘したという。酒田の郷土史家・佐藤昇一が後年、池田を訪ね、持参した『大衆日日新聞』の膨大な量のコピーを見せたところ、池田は新聞のコピーに顔を埋め声を上げて泣いたという。⁹

人気を集めた『大衆日日新聞』であつたが、やはり酒田という当時せいぜい人口三万程度の町に三つの新聞は多すぎた。やがて『大衆日日新聞』も財政的に行き詰まり創刊二年足らずで廃刊に追い込まれてしまった。廃刊後、池田は酒田借家人組合を作ったりして、また大衆運動を続ける。

当時を知る関係者は、この時代が池田にとつて一番きびしかった頃だったろうと回想している。¹⁰ 昭和五年（一九三〇年）二月の第二回普通選挙に出馬を考えたが資金工作がうまく運ばず断念している。

田舎での活動に飽き足らなくなった池田は、また上京した。刑事局長になつていた塩野から政治家になりたかつたら、新聞社に入れと、警視庁出身で読売新聞社社長の正力松太郎に紹介された。いとも簡単に読売新聞社に入社した池田は、「読売時代はどうも威張つてばかりいて仕事をした記憶が無い。評判がよかろうはずもなく、五年ほどいてやめた」¹¹

退社後、池田は塩野のところまで食客として遊んでいたが、そのうち塩野の友人である三木武吉が社長を務めていた報知新聞に入社する。論説委員として入社したものの当時の報知新聞は現在と違いスポーツ新聞ではなく、一般紙として論説室も名だたる大家がズラリと顔をそろえていた。三十歳そこそこの池田の出る幕はない。結局、二カ月後総務局長・

取締役に転じ、管理面を任されることになった。ここで経費節減に腕をふるったりしたという。

その後、戦局の進展とともに次第に強まる言論統制に嫌気がさした三木は、報知新聞の全株を読売の正力に売却譲渡し、新聞界を去った。池田も三木に従い報知新聞を退社した。ここも二年ばかりの在職だった。

翌年の昭和十七年（一九四二年）、池田は翼賛選挙に山形二区から非推薦で立ち三位で初当選した。昭和三年（一九二八年）第一回普通選挙に出馬を志して以来十四年目の夢の実現である。

この選挙の際、作成したパンフレットには三木武吉、塩野季彦のほか、当時の右翼の巨頭・頭山満、庄内出身の国家主義者・大川周明が推薦文を寄せている。¹²

この頃の池田の活躍ぶりについて、『私の人生劇場』には、「当選したものの敗戦までの軍国時代に議会主義や議会政治が通用するはずもない。おおむね帝国ホテルの地下のうすぎたない穴倉のような部屋で無力をかこつ日が多かった」、「天皇の東京市内巡幸を議会に知らせなかつたとして小磯国昭首相に陳謝文を読み上げさせるなどでウサをはらしたりした」と書いている。

敗戦後、池田は松本治一郎、三宅正一、西尾末広などからの社会党結成への誘いや鳩山一郎、松野鶴平らからの自由党結成の誘いにも乗らず、昭和二十一年（一九四六年）と二十二年の総選挙にもなぜか出馬しなかつた。一説には戦時中の大政翼賛会中央協力会議議員や報知新聞常務の経歴から追放指定の可能性がある旨消息通の知人から示唆されていたからだともいう。¹³ このことは『私の人生劇場』にも触れられていない。

この間、池田は社団法人第一科学社という出版社を設立して青少年向けの科学知識普及に打ち込んだ。当初は、雑誌『子ども科学教室』などが好評を博するが、手を広げすぎて経営が行き詰まり、昭和二十四年（一九四九年）の初めに同社を閉じることになる。

その後、池田は師、三木武吉と終始行動を共にする。昭和二十四年（一九四九年）一月の総選挙に十人が立った山形

二区から民自党公認で出馬当選し、代議士として復活を果たした。

政治家としての池田正之輔は永年勤続表彰を受けるように政治生活は長期にわたり、戦後の保守政党の中にあつてその存在は特異なものだった。特に吉田内閣の末期に、三木武吉、河野一郎らと行動をとみにし、日本自由党八人の侍として反骨ぶりを発揮、保守合同の原動力となった。

第三節 通商視察団長として訪中

池田の日中貿易促進活動にふれる前に、敗戦後、中国との貿易が再開されるに至るまでを追ってみよう。昭和二十四年（一九四九年）一月、中国人民解放軍が北京に入城した。三月に華北区（天津）対外貿易管理規則が公布され、バーター貿易が開始された。華北進出口会社が対日貿易の窓口となることが伝えられてから、再開への動きが活発になってきた。

同年五月には、中日貿易促進会（のち日中貿易促進会に改称）、中日貿易促進議員連盟（のち日中貿易促進議員連盟に改称）が相次いで結成された。同年十月一日、中華人民共和国成立。翌昭和二十五年（一九五〇年）二月、中国の沙千里貿易部（貿易省）副部長（次官）から中日貿易促進会宛に「中日貿易を発展させたい、連絡は天津の華北進出口会社が行う」旨の電報が届いた。米国國務省も日中貿易を許可したので、日本は対中輸出品リストをGHQに通告した。四月には衆参両院で「中日貿易促進に関する決議案」が上程されるなど日中貿易拡大への気運は大いに高まった。しかし同年六月、朝鮮戦争が勃発、中国人民志願軍が参加するに及んでたちまち停滞を余儀なくされた。

その後、朝鮮戦争の休戦交渉の進展を踏まえて、昭和二十七年（一九五二年）四月、モスクワでの国際平和会議に参

加の帰途、北京に立ち寄った宮腰喜助（改進黨議員）、高良とみ（參議院綠風会）、帆足計（綠風会所属但し落選中）の三名が中国側からの貿易協定調印への提唱に応えた。三名はそれぞれ議員連盟、中日貿易促進会を代表して、中国国際貿易促進委員会の南漢宸主席との間で第一次日中民間貿易協定に調印する。

これは朝鮮戦争後の不況に苦しむ産業界や新中国との関係正常化を求める国民の圧倒的支持を得た。帆足らは帰国後、各地で大歓迎を受け、彼らによる報告会はどこでも盛況だった。この協定を機に個別企業の中取引も活発化していった。翌昭和二十八年（一九五三年）七月二十七日、朝鮮戦争の休戦協定が成立、その翌々日には、衆議院で「日中貿易促進決議」案が全会一致で可決されている。こうした中、同年九月、中国通商視察団が訪中することになった。視察団は北京到着後、予定になかった第二次貿易協定への調印を促され、三千万英ポンドの協定に調印することになる。

この初の通商視察団団長を務めたのが池田正之輔である。池田は確かに昭和二十四年（一九四九年）五月に設立された中日貿易促進議員連盟のメンバーではあったが、こうしたミッションの団長は普通、トップを務めるものである。ではなぜ池田が団長になったのだろうか。池田は後に「私は吉田自由党から脱党したばかりで、少数党の鳩山分派自由党に所属していた。もともと国会議員団が外国へ出るとき団長は多数党から出すことが鉄則であるが、この時はどんな理由であったか私が団長に選ばれた」と書いている。¹⁴

が実際はそんな他人事でなく、右派社会党・松前重義の秘書を務めていた上村幸生（のち日中友好議員連盟事務局長・故人）は、「池田氏が主だった人々を個別に料亭に招いて、池田団長推薦の方向に根回していた」とのことである。¹⁵ もっとも上村によれば、当時、政府が旅券の発行を渋っていたのをはじめ、協定が成立した場合の為替決済の方法など短期日のうちに解決しなければならぬ課題が数多くあり、「この時、池田氏が率先して精力的に各方面と交渉し解決にあたった」と証言している。¹⁶ 議連の理事長は平塚常次郎だったが、一九五三年（昭和二十八年）三月の吉田のいわゆるバカヤロー解散で平塚は落選中であり、池田が理事長代理役だったこともある。議連の事務局長だった松本健一の回想録には、

「団長を誰にするか、事務局では風見章が適任ではないかと考え、会議でその話がでたら、池田正之輔がおこった。』ここまでこぎつけるのに、我が輩は相当苦勞した。いいかげんにしろと」それで、団長は池田に決まった」と書かれている。¹⁷

出発に際し池田団長は羽田空港で、視察団の目的として、①日本国民と中国人民との友好関係を深めること、②平等の立場で中国と日本との貿易を拡大する、③これらの目的を達成するためにも相互に実情を知ることが大切と述べ、今回の訪中が日本の政治外交の大きな転換になろう、との声明書¹⁸を発表した。第一次貿易協定を調印して帰国した高良とみらの成功が脳裏にあったことは想像に難くない。

一行は九月三十日香港經由、広州より北京入りした。中国側の歓迎は相当なものだったようで、この時の模様を池田は、自著『謎の国・中共大陸の実態』の「日中貿易交渉秘録」で、「中共側の歓迎ぶりは、まったく予想外で、例えば北京の飛行場からの沿道には、小中学校の生徒を動員して歓迎する。一方中共の新聞は大々的に写真入りで報道し、実に『百年の知己』の如く至れり尽せりの歓迎ぶりであった」と記録している。¹⁹

会談は十月七日から始まり、六回の会議がもたれ、同月二十九日、輸出入それぞれ三千万ポンド、有効期間は一九五四年十二月末までの協定が調印された。第一次協定調印の時は三名の署名順序でもめたが、この時はもちろん池田が議員連盟を代表して署名した。

池田はさらに次のように記している。池田のその後の中国への姿勢を考える際、この時池田が受けた印象をみておくことは興味深い。

「何か一つの問題が出てくると、必ず『日本側の意見はどうか』とまず日本側の意見を求める、何事もまず意見を出发させておいて、その取捨選択は中共側のペースで進めてゆく、ということである。こうした中共側の交渉態度は、日本国民として充分銘記しておく必要がある。他民族に対するこうした態度は、中国数千年の歴史に一貫していることで、こ

こにも中共の中華思想と大国主義的態度が見られる」²⁰

かなり辛辣な批評である。これは後の第三次、第四次、とくに第四次交渉での体験をふまえ、一九五八年の貿易中断以降、岸信介に接近していった後に書かれた文章であるので、その点は留意せねばならない。

生来、気短で鼻っ柱の強い池田は、建国間もない中国側の関係者が何事にも個人の決断でなく、集団での意志決定を行うため時間がかかったことに対し苛立ち、短絡的に中華思想と決め付けたような印象を受ける。

この訪中で池田は周恩来首相の二時間余にわたる単独会見を受けた。周恩来首相に会った日本の政治家はほとんど誰もがその人間性に魅了されるが、この点、池田は周についての印象をどこにも残していない。ただ周総理の、「日本と中共とはお互いに仲良くしていかなければならない。お互いに政治問題と経済は別であるから、政治と経済を分離し、ま

ず経済交流をおこない、あくまでも穏歩漸進(ママ)でやっていきましょう」という発言だけはその後何度も引いている。また「この会談を通訳したのは廖承志氏であって、廖氏がハッキリと政経分離・穏歩漸進(ママ)と通訳したのである。また、このことは南漢宸・国貿促主席や陳雲・副総理、彭真・北京市長その他中共側の代表者たちから、『お互いに政治形態が違っているのだから、政治問題は別にして相互の立場を理解しあい、穏歩漸進(ママ)、互恵平等で行こう』という言葉があらゆる会合に使われていた事実によっても容易に裏づけられることかと思ふ」とも書いている。だから池田は、中国は当初『政経分離』と言っていたのに、後から『政経不可分』になりけしからぬというわけだ。

視察団の報告会は日比谷公園で盛大に開催された。視察団に関する記事を取り上げるよう新聞社、通信社を集め働きかけも行った。マスコミ出身の池田らしい戦略だ。

同年十二月十日に日中議連発足一周年の第一回総会が開催された。総会では第二次協定実施、仮契約の実現、中国側代表団の訪日招請、といった目標を含む運動方針が確認された。²¹

当時の日中関係で議連が関わる仕事は貿易だけではなく様々な問題があった。この時、急に浮上してきたの

が中国紅十字代表団の招請問題である。この発端は昭和二十七年（一九五二年）十二月より始まった中国残留邦人の帰国問題だった。日本赤十字に対応する中国紅十字の協力を得て、昭和二十八年（一九五三年）十月までに二万人以上の日本人が帰国した。中国側に謝意を表するため、ここに中国紅十字代表団訪日招請が大きな課題になった。こうした課題に池田は懸命に取り組んだ。池田がこの問題に熱心だったのは、郷里山形県から旧満州に開拓団として渡った農民が、長野県について全国で二番目に多かったということもあつたろう。池田は帆船計らとともに外務省との折衝、国会での招請決議のために尽力した。

池田らの努力の甲斐あつて昭和二十九年（一九五四年）十月三十日、李徳全国務院衛生部長（大臣）兼紅十字会会長を団長とする中国紅十字会代表団が来日した。一行は新中国建国後初の公式代表団として二週間の滞在中、日本各地で大歓迎を受け、その後の日中関係の発展に大きな役割を果たした。

一行が日本でどのように迎えられたか、記者として同行来日した眞学文は、「東京からの第一報」という文章で、「各界の著名人が代表団との会見を強く望んだため、赤十字社と平和友好団体が組んでくれたスケジュールは、秒刻みで動くような内容だった」、と各地での熱狂的な歓迎ぶりを記している。²⁴

こうした動きの中で池田は中心的な役割を果たす。その原動力は日中貿易促進という政治外交課題を吉田内閣に提示することで、反吉田という旗幟を鮮明にすることもあつた。昭和二十九年（一九五四年）十一月、反吉田を標榜する新党―日本民主党が結成され、同年十二月には、池田の念願した鳩山内閣が成立した。民主党の外交政策は、簡単に言えば吉田内閣の「親米追随外交」に対し、米国の影響を出来る限り排除し、自主的な国民外交を展開して、東西対立を中心とした緊張を和らげ、アジアの復興と世界平和の実現を期するものであつた。とくに自主外交として、ソ連・中国など対社会主義圏、特に中ソ両国との関係改善を掲げた。

しかし中国との関係改善は、当時の日本がすでに台湾の国民党政府と国交を結んでしまっていたので、何をするにし

でも難しかった。そこで鳩山内閣は、日中関係の本格的打開は見送り、もっぱらソ連との国交回復を優先課題とした。それ故池田が取り組んだ日中間貿易の推進は、鳩山内閣が真正面から取り組みなかつた「日中関係の改善」を側面から推進するものだったとみることが出来る。

第二次協定時の約束で、第三次協定交渉は、東京で行うことになっていた。昭和三十年（一九五五年）三月、雷任民対外貿易部副部長（政府機関の肩書では外務省当局がクレームをつけることが予測されたため来日時の肩書は中国国際貿易促進委員会主席代理）を团长とする代表团が来日した。紅十字会代表团に続いての大型代表团で一行は三十八名と、紅十字会代表团をしのご規模だった。

この代表团を迎えたのは、池田の議員連盟だけでなく、前年九月に設立された日本国際貿易促進協会も加わった。同協会の会長は、戦前商工大臣を務め、戦後は財界の有力者であった村田省蔵だった。この頃から池田の対中国交流面での存在感は微妙に薄れてゆく。池田を顕彰して作成された『反骨の政治家池田正之輔』では、初期日中貿易の功労者として村田省蔵ばかりが言われるのは不公平だとし、その代表的な例として内田健三の『戦後日本の保守政治』をやり玉にあげ論難している。²⁶⁾

第三次協定で問題になったのは、第二次の協定調印の際、覚書で合意した①通商代表部の相互設置、②両国通貨による直接決済方式の実現、③貿易不均衡の是正であった。通商代表部の設置については、日本側は両国に国交がない時点で、民間貿易代表の交換にならざるを得ないと判断したのに対し、中国側は通商代表部員は政府代表もしくはそれに準ずる代表部権限を有する、即ち外交官特権を与えられるべきだとこだわった。

また決済問題について中国側は、覚書で確認したとおり両国通貨による直接決済方式を要求した。しかし日本側には、こうした決済方式の改善は両国の政府系銀行が結局は交渉をもつことになり、これは政府間接触につながるとして強い抵抗があった。

さらに貿易の不均衡も日本がアメリカの圧力のままに中国向け輸出に制限措置をとっていたので、これも政府が努力しなければ解決しない問題であった。つまり三つの問題とも日本政府が動かぬ限り進展は難しく、政府間協定が必要だった。国交がない両国が政府間協定を結ぶことは容易ではない。にもかかわらず当初、池田をはじめ日本側代表は交渉の成り行きを楽観していたという。鳩山側近をもって自認する池田は、『オレが鳩山さんと話をつける。まかせておけ』と太鼓判まで押す始末であった²⁶⁾。

すでに吉田内閣から鳩山内閣に代り、閣僚には対中関係改善に前向きな石橋湛山が通産大臣、高碕達之助が経済企画庁長官に就任していた。石橋や高碕の対中関係に関する前向き発言への期待も日中双方の交渉当事者にはあった。しかし交渉は二週間以上が過ぎても進展が見られず暗礁に乗り上げた。あとは政治決着に委ねるしかない。流れとして議員連盟の池田に期待が寄せられた。池田は、これに応じるべく大いに活動した。雷任民代表を相手に第二次協定を結んだ経緯があり、雷への信義もある。政府間協定が駄目なら、せめて協定の合意事項を実行に移す保証を日本政府が与えるべきだとして政府に強く迫ったが、外務省の主張を入れた政府はこれを拒んだ。

行き詰まった局面を打開するために取られた妥協策が、日本側代表団が鳩山首相から第三次協定に対する支持と協力の言質を引き出し、これを文書にして確認し、協定本文を補うという方法である。この間の事情を草創期から日中貿易に携ってきた押川俊夫は、議員連盟事務局の中尾和夫、上村幸生から聞いた話として、こんなエピソードを紹介している。「池田が国会の総理室の前でピケを張る。車イスでやって来た鳩山首相を廊下で捕え、かねて準備した書面²⁷⁾協定を支持、協力する²⁸⁾」を読み上げて署名を求めた。池田が総理に確認を求めたところ、署名して鳩山は、『それでいい、よろしくやってくれ』と答えたという²⁹⁾。この時鳩山は実際には署名しなかったようだが、池田が奮迅努力してもぎ取った鳩山の言質は、次のような書簡となって中国側に渡された。

【村田省蔵、池田正之輔氏から雷任民氏への書簡】²⁸⁾

貴我双方の間に一九五五年五月四日東京において締結された日中貿易協定にたいしてわが国政府が支持と協力を与える問題に関し、日中貿易促進議員連盟の代表が一九五五年四月二十七日鳩山内閣総理大臣に会見した際、鳩山内閣総理大臣はこれにたいして、支持と協力を与える旨明言いたしました。

右御通知いたします。

一九五五年五月四日

日本国際貿易促進協会会長 村田省蔵

日中貿易促進議員連盟代表理事 池田正之輔

中華人民共和国日本訪問貿易代表団団長 雷任民先生

この書簡に対し、雷任民団長もこの書簡を受領した旨書簡に認め村田、池田両代表に手渡した。この往復書簡を協定付属文書とすることで交渉を妥結させ、調印にこぎつけることができたが、これは鳩山個人による「支持と協力」であり、日本政府として合意事項を実行に移す意志を示したわけではない。しかし中国側は、日本の首相が「支持と協力」を約束している以上、合意内容は当然、実行されると受け止める。ここに池田たちが無理して調印にこぎ着けたものの、大きな爆弾を抱えたようなことになったわけである。

第三次協定は、輸出、輸入それぞれ三千万英ポンドの総額枠を決め、上記書簡にもあるように五月四日調印された。展覧会の相互開催など合意に達したほか、懸案の三点のうち、決済問題については、第五条で、「双方の取引上の支払と清算は、日本銀行と中国人民銀行との間に支払協定を締結し、清算勘定を開設して処理する。両国の国家銀行間に支払協定が締結されるまでは英ポンドによる現金決済とする」ことになり、また通商代表部問題については、第十条、「双方はつ

ぎのことに同意する。互いに相手国に通商代表部をおくこと。日本側の常駐通商代表部は北京におき、中国側の常駐通商代表部は東京におくこと。双方の通商代表部および部員は外交官待遇としての権利があたえられること²³⁾が明記された。池田は、調印祝賀パーティーにおいて、「今後われわれ議員連盟としては、今度の貿易協定によって将来に残された各種の問題について一層の努力を致し、日中両国のためにも、中国側の好意に報いるためにも、努力致したい²⁴⁾と挨拶した。残された問題が各種あつたにせよ、第三次協定の調印は当時の日中関係にあつて日中貿易業界のみならず各界から歓迎された。

第三次協定を実施するため、産業界から同年九月に大型代表団が派遣された。日本国際貿易促進協会の田島正雄に率いられた訪中日本実業団は、中国側と輸出入往復千二百万英ポンドの貿易議定書に調印した。翌昭和三十一年(一九五六年)七月には同じく日本国際貿易促進協会の伊東今朝市が率いる第二次実業団が四百万英ポンドの取引契約を結ぶ。日中貿易は活発化の兆しをみせてきた。だが日本政府がココムの対共産圏禁輸措置を厳格に守っていたため日本側の輸出では大きな制約を受けていた。こうした状況に対し池田は村田会長や南郷三郎輸出入組合理事長とともに鳩山首相に会い、ココム禁輸解除と日本が中国で開催する展覧会に対し政府が補助金を出すよう陳情している²⁵⁾。

訪中実業団は、「日中貿易協定における丙類商品取引に関する議定書」に調印したものの、その実行は日本政府の措置により実行がなされていなかった。これに痺れをきらした中国側は、昭和三十一年(一九五六年)二月二十日付けで日本国際貿易促進協会宛に議定書を解約する旨通知をしてくることになる。この後第三次貿易協定そのものの有効期限が迫る中で、日本国際貿易促進協会と日中貿易促進議員連盟は連名でとりあえずの延期を申し出、中国側へ連絡した。

これに対し中国国際貿易促進委員会の雷任民副主席も同意するが、同副主席は、早期に同年の貿易額の拡大ならびに通商代表団の相互設置、支払協定の締結等第三次協定の未解決問題について意見の交換をするため直接の協議を行いたいと提起してきた。これを受けて同年十月、池田は、日本国際貿易促進協会の村田会長および日中貿易促進議員連盟の

勝間田清一、加藤高蔵、帆足計らとともに訪中する。だが第三次協定を翌年の五月四日まで延長することを確認するものの、懸案事項の妥結にはいたらず十月十五日、「日中貿易の一層の促進に関する共同コミュニケ」に調印するにとどまった。コミュニケには、延長期間内に常設の民間通商代表部の相互設置を実現するよう努力することなどが確認されていたが、懸案問題だけに解決は難しいことであった。

その後、池田は、社会党など野党と一緒にだと中国側との交渉が難しくなると考え単独での訪中受入れを要請するが、中国側は池田のみの受入れは断った。これを受け第四次協定の協議のための通商代表団が編成され、九月十五日北京に向かった。交渉は予測されたとはいえ難航を極めた。

池田は、後になって『謎の国・中共大陸の実態』所載の「日中貿易交渉秘録」で、この時の交渉を詳細に記述している。この時の体験が後に中国に対し辛辣な批判を行うようになる出発点になっているので引用してみる。

「かくして四十数日間の北京滞在中で、わずかに一、二度、八達嶺見学や近所の寺院などにドライブしただけで、会談も本格交渉も、まったくなされなかった」^②

「四十数日間を無為に過ごしてしまったわれわれは、その間毎日何らなすことなく先方の連絡を待つばかりで散歩にも出られない。一体、何時になったら会談を始めるのか見当もつかない、すべては中共側の『ご都合次第』ということである。これほど愚弄されれば、体面などあったものではない。私はついに『これ以上の侮辱に耐えられないから引き揚げよう』と言い出した。このため中共側は『それでは明後日の朝七時に飛行機を準備します。それまでの間に交渉を開くことに致しましょう』ということになった。かくしてその日から会談が開始されたのであるが、断片的な話だけで、何らまとまった意見交換もなされないうままに、帰る日の夜十二時頃になって『これから会議を続行致しましょう』といってきた。これが最初にして最後の本格的会談であったが、それまで何一つ協定の内容について討論もしていないのに、その時会場に入って席につくや、突如として『これがわが方の案である』といって中共側の案を提示された。のっぴきな

らぬ時間切れのギリギリの時まで追い込んで、向こうの案文を突きつけて承諾を迫るのが、中共の常套手段である」^③
なるほど、「これはひどい。やはり中国という国はそういう国か」と、これを読めば誰もが思うかも知れない。しかし事実はどうか。一九九九年に復刻出版された『日中貿易促進議員連盟関係資料集』第三巻に収められている日中貿易協議連週報一九五七年十一月五日付け「資料特集号・資料二」には代表団より日中協議連事務局に寄せられた「公電」と称した電報文が載せられている。

「公電」第三信は九月十七日北京発で、同日の北京安着を知らせている。当時は両国を結ぶ直行便は無論ないので羽田から香港に飛び、中国・広州を経て三日目に北京に到着したわけだ。十八日第四信で中国側の協商委員名簿が渡されたことを伝えている。南漢宸主席が病気のため第一回の連絡会は二十一日になった旨知らせてきた。二十三日の第五信では、「本日第二回協商委員会が開かれ、全般の問題、特に民間通商代表部について、双方の意見が述べられた。基本問題について意見の一致をみたので、次の小委員会に別れて(ママ)協商することになった」として、第一、民間通商代表部に関する委員会、第二、決済問題に関する委員会、第三、貿易拡大に関する委員会が、双方の責任者を決め発足したことを伝えるとともに、「協商は、きわめて友好裡にかつ円滑に運びつつあり」と池田団長名で打電してきている。

さらに九月二十九日の第六信では、「三十日まで、代表部二回、決済一回、商品分類四回の小委員会と仲裁及び検査に関する懇談会各一回が行なわれ、いずれも友好裡に双方の具体的意見が、忌憚なく述べられた」としており、池田が『秘録』で記しているのとは違うのである。もっとも到着翌日十八日から二十日まででは前述のように南漢宸主席の病気を理由に日程がブランクになっており、池田が苛立つたのは分かるが、四十数日のうち最後の数日しか交渉がもたれなかつたような記述は大袈裟であろう。この間の記録については、一行からの公電のほか、共同通信社から随行した山田充彦記者がほとんど毎日、その日の動きについて報道している。また十一月二十六日付け協議連週報には詳細な日誌が掲載、紹介されている。これを見ると確かに交渉が五十日間に及ぶのは現在の感覚で言えば異常だが、午前中は会談、午後は観

光、夜は観劇などで埋まっており結構タイトなスケジュールとなっていたのである。

ところで池田は、前記九月二十三日付け公電で、交渉はきわめて友好裡に運んでいると打電してきているが、もちろん内容的には交渉は難航を極めていた。交渉では主として通商代表部設置問題―とくにその人数、指紋押印、安全保障などについて最終的に意見一致をみるにいたらなかった。日本側代表団は、中国側の提示した第四次協定案、およびこれと不可分の文書であるとした同覚書について検討した結果、本国政府との協議を必要とすることを理由に交渉の一時休止を提案し、帰国することになる。

引用文献・資料

- (1) 『新編庄内人名辞典』庄内人名辞典刊行会編・刊行 一九八六年 一三四頁
- (2) 『コンサイス日本人名事典(改訂新版)』三省堂 一九九四年 八三頁
- (3) 『池田正之輔』刊行委員会編『反骨の政治家池田正之輔』刊行委員会 一九九五年 三四七頁
- (4) 八幡町史編纂委員会『八幡町史(下巻)』一九八八年 三三八頁
- (5) 酒田市史編さん委員会『酒田市史』改訂版下巻 一九九五年 五六九頁
- (6) 佐藤昇一『蒼い大草原―満蒙独立の志士齋藤元宏』生誕百年祭実行委員会 一九八七年 四一―四二頁
- (7) (3) 三五〇―三五二頁
- (8) 岩本由輝『山形県の百年』山川出版社 一九八五年 一八四頁
- (9) 佐藤昇一『無産運動最初の日刊紙『大衆日日新聞』』上・下
酒田の明治・大正・昭和史『コミュニティー新聞酒田』一九九八年六月一・二―一日
- (10) (3) 五三頁

- (11) (3) 三五二頁
- (12) (3) 二三八―二三九頁
- (13) 池田の秘書を務めた元酒田市長相馬大作氏からの聞き取り(二〇〇〇年五月一日)
- (14) 池田正之輔『謎の国・中共大陸の実態』時事通信社 一九六九年 三三四頁
- (15) (3) 二八九頁
- (16) (3) 二八八頁
- (17) 松本健二『戦後革命運動の内幕』亜紀書房 一九七三年 二四四頁
- (18) 波多野勝『朝鮮戦争後における日中貿易の政治的背景』『常盤国際紀要』創刊号 一九九七年 五五頁
- (19) (14) 三三七頁
- (20) (14) 三三六―三三七頁
- (21) (14) 三三八頁
- (22) (14) 三三八頁
- (23) (18) 五七頁
- (24) 吳学文『東京からの第一報』『中国人特派員が書いた日本』日本僑報社 一九九九年 二五頁
- (25) (3) 三一―一頁
- (26) 古川万太郎『日中戦後関係史』原書房 一九八一年 一一七頁
- (27) 押川俊夫『戦後日中関係とその周辺』図書出版 一九九七年 二〇七頁
- (28) 『日中関係資料集』(一九四五―一九六六) 日中貿易促進議員連盟 一九六七年 一五七頁
- (29) (28) 一五四―一五五頁
- (30) (28) 一六〇頁
- (31) 日本国際貿易促進協会『年表国際貿易促進四十五年の歩み』一九九九年 二〇頁
- (32) (14) 三四四頁
- (33) (14) 三四八―三四九頁